新 今昔物語 第18話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑦
『キリシタン　歴史に残る　三箇城』

三箇5丁目の菅原神社付近には中世において城があったとされており、神社前には大正8（1919）年に大阪府によって建立された「三箇城址」の碑が残されています。

三箇城は、江戸時代に深野池と呼ばれるようになる大きな池の島の中にあり、東方に飯盛城や野崎城、西方には榎並城が控え、北河内の要衝の地に築城されていました。

築城の時期は明らかでありませんが、当時の文献である「経覚私要鈔」文明3（1471）年7月20日条に「遊佐五郎、河内三个ト云所ニ取陣在之」（遊佐五郎、河内三个という所に陣を取りてこれあり）とあることから、これ以降、城としての機能が整っていったものと思われます。

また、当時の城主についても明らかでありませんが、「大乗院寺社雑事記」明応2（1493）年2月の記録では、羽曳野市に築城されていた高屋城を本拠にしていた畠山基家の支城であったことがうかがわれ、河内国の守護であった畠山氏に関係した人物であったと考えられます。

時代は流れ、永禄5（1562）年ごろには畿内を治めた三好長慶の家臣であった三箇伯耆守頼照が城主になりました。その頼照は三好長慶が永禄3（1560）年以降に居城としていた飯盛城で洗礼を受けたため、キリシタン武士となり「三箇サンチョ」と呼ばれるようになりました。

三箇サンチョは、キリスト教の布教に非常に熱心であったことから、畿内におけるキリシタンの中心人物としてヨーロッパにまで名を馳せていました。（生涯学習課）

三箇菅原神社前の石碑